



天明三

癸卯
初懷
年

全



門ことにたつる小松にかさゝれて

宿てふやとに春は来にけり

かゝる言葉の千載不易なるを

感して新古の境を論せず

憶帝はしめの俳諧連歌を

ひらくにかの聖の詠をもて

序となすましかり

春夜主人晋明書



天明三癸卯春



正月十一日於春夜樓興行

俳諧之連歌

几董

や、月有明そめし柳かな

空に蒔給の帰雁ひとつら

湖虫

春の旅玉珥を侍らす駒引て

春坡

茶も乞による百姓の歌

之兮

さむしろに昼寐の鬮あなかと

万容

南より来る風こころよき

路曳

願ひある紀州にれも打おさめ

九湖

始めとくもかくす母親

魚赤

物いまひ錦裁日もえうふつ

是岩

霜つきかけし時雨降也

都風

舟ぐらぬ木所筋の川ちり

自珍

我宿札をさかす挑灯

魯佛

酔たはと僕か肩に月を見て

仙畧

捨いという女扇露けき

杉月

古塚にゆかりか秋をしのぶらん

我則

人まれふして洛馬おかし

橘仙

ものいわぬ花に向つて狂言よみ

湖柙

暮遅きまゝに両を催す

蚕奴

源八の渡もあとに行春や
 いせ彦系宮の連女へにけり
 右一順未畧
 志逸
 雷丈

分題

初鷄の聲よりかすめ十万家
 ↑ 葦はまた脛にと、かすか(る)雁
 接木して南を向す小枝かな
 起ぬ家も日新さす也春の朝
 たんほ、や才歳やすむ閑の松
 九湖
 魚赤
 万容
 踏曳
 都風

(大東京文具子エーシ特製)

入相につき落さる、雲雀哉
 涼瓜
 淀舟の枕すれゆく木芽かな
 橘仙
 やり羽子や馬の尾に付く十字街
 自珍
 春浅き餘寒の空や明くれに
 湖柳
 寶引に勝花嫁や燈の後
 湖虫
 春雨や朝買あてある妹かもと
 仙魯
 雛啼了丘何するなる免かな
 我則
 うくひすや挑灯しめす竹の陰
 春坡
 遠山の低く見え越す柳かな
 之字

春曉

考案手を拱て梅見哉

志逸

當日文音三句

うう見ゆるむかし麻子やわかた樽

浪華 竹裏

あう玉の文をしほりや考曙抄

女 うめ

起くや背戸へ去れば江の柳

字流田原 野竹

同席上

去年落し菊のひたいの葉葉かな

是岩

酔好この女かやとや 鮎脰

魯佛

紅梅もいともし頃や二日欠

唇奴

納豆桶洗いおさめぬ寺の春

杉月

(大東京文具子エーシオン特製)

凍とけて田螺の動く門田哉

杜喬

涅槃守やとし家こそる臺の隅

芝山

考の夜や女の声すなには舟

素

大岳の次男中しやう月しめ

如菊

正月もけふ限なるに余空哉

雷天

坊凡中に追付かおるちまら哉

少年 車壁

うれしさよ梅見る人の数に入

八歳 竜号

万葉にはしめて来たり隣の子

旧年 米松

意猫の壁 かくれや萱の影

乃佐女

伏水社中

青柳に伏尺の小舟いさかうん

買山

春雨や苺のかゝる 庵の淵

麻卜

伽羅くさき古着かつきつ春雨

其韻

東風咲日北窓あけるあるし哉

楚尺

藪かけにまた海ぬ雪や苺のとう

湖陸

庵のみきり 偽木の

すくくと生たりけしは

芭蕉下僧

花に來る客またるや春雨の雪

松宗

細代木のゆるく夜ころや朧月

春夜

其引

うす氷とけて野川の根芹哉

鶴汀

小魚むれゆくかけろふの鯉

晋明

公達の乗物たつる永き日に

苺打

柳には降とも又えす春雨の雨

窟汀

鶯や鞠る庵の につ

巻打

但聞人語郷音

梅屋し奴にくるゝ小さかつき

晋明

正月廿一日於春夜樓興行

俳諧之連歌

夕附日すみれの影も尺ばかり

正巴

春ゆく水や岡山の裾

几董

いお蛸も塩ものうりの商ふて

道立

魚の黒子も兄によく似た

維駒

たはれたる連歌始る月侍に

之号

萩の巾殿の袂のしら露

我則

垣たふす野合の竹助の忍しく

本坡

念佛唱ふる船頭の妻

松化

比日ころ三杯の酒を酔にたり

佳棠

雨跡けは昼も蚊もうつ

百池

かゝる地よすくせいがある遊女で

是岩

夢に逢ふたる人のつれなき

月居

二千里の外とは見えし花に月

蕪村

うこかぬ水に小舟さす春

執筆

當日兼題

紅梅

紅梅の幹に屋根おく行の者か存

道立

紅梅や節分おとれし女客

維駒

紅梅やうつほ竹とりまいつれ
正巴

月名西に紅梅うすし昼の鐘
百地

二三輪紅梅散りぬ水の上
佳崇

紅梅の木す衛や低きやかた城
之号

紅梅にむら雨そくあした哉
考坡

長閑さや紅梅うつる手水鉢
松化

紅梅や御臺供養の日もうら
秋則

紅梅にまた涙きさくら
是岩

紅梅の咲盡しけり唯ひと木
月屋

紅梅に睡り勝士の文五郎
几董

(大東原文具チエーン特製)

紅梅の落花焼ら玉馬の巻雲
蕪村

旧跡よりいむことの侍りて

いさく心電居せいかは

きさらきの朔日を我御菱かな
熊三

白菖の笠古ひるや春の雨
菱湖

雨謁モヤかゝるしく水の亭や春の雨

甚引

雨ならぬ空の濁りやおほろ月
金竹堂

ものいわてあふむ睡りや春の暮
如夢

浅川にかくれかぬたゝ田螺哉
雪屋

かくりたに谷のあとあり梅花

池田

田福

花は都物くる敷はありせりと

いふ句によりて古郷の春と感ず

浪華

百樓

大坂ははいかいてな——初芝居

膝抱て門田の蛙きく夜かな

伊丹

通助

飛越て尺水は氷なし朧月

クハラ

東尾

松ありし上野、城やおほろ月

但馬

桢菊

空をゆく鳥何くと残る雪

因山

東武より書信

木かくれて裏梅尺ゆる野川哉

浪連

弄田國

(大東京文具チエーン特製)

雨迄き日をうくひすの高音哉

弄我

春興

うれしきに春の街や雨後の人

社口

さるやゆたふたをこほかりれ

定雅

山くすかたは見えす春の雨

来之

飛越を踏とくまうく野芹哉

松洞

狐火の尺えすちりゆく焼野かな

芦江

古臭き連歌めてた——春の雨

来雨

青柳に包みて清し漁父か歌

二貞

わか草に根附落せぬや誰
莖漬に梅のにはひや雪菜

郊外

子史
東助

三日月の影踏濁す蛙かな

晋明

其引

淡雪に齊くする子の筆問はむ

徳野

足冴の中や遠ひし鶏合せ

文皮

聖しらぬあら田に生ふる莖かな

舞岡

雪とけや曇らぬ色ぬ竹代

社藁

水音は芹摘す急の大河かな

管鳥

(大東京文具子エーン特製)

ゆく水の淡き在すきや田螺とり
まつりき枕に近し蚕棚

心頭
五雲

浪華

雨去らぬ月のひかりや初蛙

銀獅

板か香やいと夜ふし足の袖土産

邦洞

辰連六句

長き目に曳綱つゝる海辺哉

橘皇

寐た牛に蝶をけしゆく堤かな

雨凌

かすむの柳のすかたやなき哉

可長

長閑きや玉眼光る大師臺
わか鮎や濁まて雲の谷間より
蕨入やけしは寐よとて春の雨

書信

春の夜や配を乞に暮る隙あり
梅窓し春明炭圍うつ音か
やすむとしありを瑞うし庭の梅
雪や人かましととちへやう
ふり向てゆく人やさし蕨の梅

東美

(大東京文具子エーン特製)

梅の門柳の小袴ときめかし
うめ香や竹の嵐は夜の女の
梅の門柳の小袴ときめかし

南部

邊三句

樓に遊女の夢や春の月
露下りて田に懸る根芥かな
しくものも春明白し花むしう

柳字更

おもしろや手折らぬ梅の枝配
蝶花のらんや春の雪
と男女に恥る風情あり

大津

ハセ

南尺 合浦 騷道

駿馬かす隣もあつて福はかし

伊住庵 達涯

こほれたる白魚拾ふ雪片かな

茶堂 永字

管に善促しそ 窓の雨

遠随 永字

灘 大石卯包

麦の塙に日は斜也きりの声

士川

五つ置く暮の友来たり 梅の宿

士喬

歩あたる道者やしや 春の水

士巧

春雨や 寐 ぬれは 中 中 海 の 音

守明

みとりしてほしく 離の柳哉

西行庵尼 壽照

都邊や 小袖に 滴る 春の雪

浪速 扇更

わすれ音に 鳴妻猫や 春霜

二柳

流 出るところは しろす 春の水

尾羽 蝶号

わか茶野に 三輪の酒より 出さぬ

江戸 曉甚屋

異見きく耳す ほめけり 神の恋

江戶 暮今太

かく夜長帯力はさうなき 数寄もの
世けり古曾尸の入道けり ぬてのゆきんに
そ出物見すへきとて 錦の小峰をさかし
もとめける風流など おもひ出つゝ 墨をきき
すゝる春色に堪す侍れは

山吹や 井手も流る 艶膚

蕪村

附録

戲擬天和古調十八句

脛あさつき和尙日 あさつき の 緑 獨活 の 紅井

之号

對頃悟て逃る 飯 蛸

晋明

ワキ 躍春 る る 時 をかす むら 玉

拍子木の妙手に祿給ひけり

之

番代り傾くまでの月を又し

、

かうろぎの遠根に 席の明かた

、

竜田姫或仙人とくま名たち

晋

欠落もの、やうかくれして

、

(大東京文具子エーン特製)

ことより水菜を作る 秦の國

之

東寺の先祖 未生以前に

、

眞書や 難波津のうた か 唱歌

晋

日待賑ふ民の 三 線

、

田樂のけふり臭きとしのふら

之

飯中法印てふ 医師ありけり

、

今宵月に人の目引を催され

晋

瑠璃 サモアラハシ 遮 莫 西 瓜 燈籠

、

君不ヤ見島原 記 中 秋 に 花と操と

之

太祇 句集の朽ぬさくら木

、

右漫筆

冬日三たり伏水へまかりけり
途すがり眼前のけしきをも申侍り
ければこれにちかひしてゆく
深羊の辺りにて一羽ばかりになり
ゆればやかて此のほしにかおつけ置ぬ

五條から舟借る人にあらし哉

松化

もめん頭の中うしろ吹風

晋明

米運子苺に鳩の一羽来り

考坡

願わし過の月かすか也

化

いふくに度のもみ地もぬあかり

明

(大東京文具チェーン特製)

はてぬ善誘のや、定るき比

坡

雨はれて近きや中る暮の鐘

化

あやめ葺日に来ぬ君を待

明

うち恨^た葉と香にまみつり

坡

いつのかたみの後のたれ衣

化

金持の質屋の亭主帽をわて

明

踊は去来す初夜過る秋

坡

こぼすと樽の酒次り月影

化

太刀魚とれり須戸の獺船

明

一ときに下りて又忍ぶむう鷗

坡

鷗

十四

十四

鎧の袖をかさす夕陽

比

落花踏て秋頭まぢかく来たりけり

明

角なき鹿の睡る山陰

坡

その夜伏見にとりて標題

鉄砲の玉にすれゆく落葉ふ哉

考坡

河豚汁の寝物かたりやかくし妻

杉化

峠行馬上の人や冬来たり

晋明

半たちて夢やるせむし草若き

几董

嘗や田の邪广に成竹むらに

遅き日の乳復照らす禁川

俳諧一折

春雨や蓑のしたなる 恋の夜

呼おは誰声柳かくしに

初舞に夜のりの小舟さつれて

あか季さめゆく弓張の影

秋涼し母屋の柱にゆりかゝり

吹笛の音の残も夕に玉

財^{タカラ}返す盗人いかにやさきや

松^{モト}告^{イリ}きりり唯すゝり泣

ほとゝきすまゝて管根の山か

あかきふに合む 雨月のむら雨

しのひ路や思ひあまりの落馬して

つらさを祈る 清水のか

いなつまに十七日の月の雲

四手うつ小家江を隔つ

番船の早き傳中末の秋

道さしと盛ん 一椀の酒

幸君か扇に花や散ぬらん

くれそめてまた暮ぬるのり

各 春夜樓獨吟

活書林稿仙書林

(大東京文具子エーソフ製)



十言

